

Streptococcus gallolyticus subsp. *pasteurianus* による 新生児重症感染症の 2 例

音田 泰裕^{1), 2)} 太田 栄治^{1), 2)} 川野 裕康^{1), 2)}
新居見俊和^{1), 2)} 石井 敦士^{1), 2)} 宮本 辰樹^{1), 2)}
瀬戸上貴資^{1), 2)} 藤田 貴子²⁾ 中村 公紀^{1), 2)}
森 聡子³⁾ 廣瀬 伸一^{1), 2), 4)}

¹⁾ 福岡大学病院総合周産期母子医療センター 新生児部門

²⁾ 福岡大学病院 小児科

³⁾ 福岡山王病院 小児科

⁴⁾ 福岡大学医学部 小児科

要旨： *Streptococcus gallolyticus* subsp. *pasteurianus* を起炎菌とする新生児重症感染症 2 例を経験した。2 例とも血液及び髄液培養から本菌が分離された。症例 1 は、在胎 37 週 1 日、出生体重 2,356 g の女児。日齢 5 から持続する発熱があり、日齢 6 に細菌性髄膜炎と診断し抗菌薬投与を開始した。臨床経過は良好であったが、退院前の検査で脳波異常が確認された。症例 2 は、在胎 37 週 2 日、出生体重 2,092 g の女児。日齢 13 より発熱が出現し、全身状態が急激に悪化した。集中治療にも関わらず、発症から約 15 時間後に死亡した。新生児や乳幼児において、*Streptococcus gallolyticus* subsp. *pasteurianus* による感染症の報告はまだまだ少ないが、致命的な経過を辿る例もあるため、起炎菌のひとつとして念頭に置く必要がある。

キーワード： 新生児敗血症, 母子感染症, B 群溶連菌, *Streptococcus bovis*